

植物が主役になる日

別所-上原 奏子

植物は地味だ。

どのくらい地味かという、巨大な木の前を100人以上が素通りするくらいには地味だ。小学生の興味No.1はカブトムシか恐竜だろうが、植物は空気の次に興味のないものにランクインするだろう。しかし、植物は地味だけどころ活躍している、いやというかむしろ人間や他の生物も含め、植物無しには生きられない。植物は光合成により二酸化炭素を酸素へと変える。お米やパンも元をたどれば植物である。紙の原料も植物だし、今注目されている代替エネルギーも植物由来だ。こんなにも我々の生活に貢献している植物なのに、ただ樹液をなめているだけのカブトムシに人気で勝てないのはなぜなのか。

頭の中で仮想小学生たちの声が響く。

「植物は動かないからつまらない」

「どれも緑一色なだけじゃん」

「どこにでもありふれていてレア感に欠けるんだよねー」

なるほど、君たちの目には植物がそう映っているのか。わかる、わかるよその気持ち。私も大学に入るまでは植物にほとんど興味がなかった。でも植物の研究者たちの研究を目の当たりにしてその印象は大きく変わった。

まず「植物は動かない」というのは大きな間違いだった。植物は動く、ただし根ざしたところを中心に、ゆっくり。シロイヌナズナの茎は実は1日に10回転くらいしている。ただそれがゆっくりでずーっと見てないと気づかないというだけ。また、植物の中には周囲の環境の変化に敏感なものもいる。浮きイネっていうイネは、洪水地帯に生息しているが、こいつらは洪水が起きて自分が水の底にいることを感じると草丈を伸ばして葉先を水面に出す。そうすることで呼吸を確保している。他にも、アオムシに葉っぱをかじられたキャベツは化学物質を空気中に放出して、アオムシに寄生するハチを呼び寄せたりもする。植物は根ざしたところから大胆に逃げることはできないけれど、それを補うべく他の「伸ばす」だったり「助けを呼ぶ」という新たな戦法を身につけている。

え、そんなの初めて聞いたって？ そうだね、これはここ10年くらいの発見で教科書にはまだ反映されていないかもしれない。そのへんに生えている植物も実は生き残るために巧妙な戦略を保持している、と考えるとちょっとワクワクしてこない？

小学生に植物の魅力を知ってもらうにはどうするのがいいのだろうか。本屋をのぞいても昆虫・恐竜図鑑や絵本はたくさんあっても、植物関連の本は数が少ないしどうも冴えない。「愛なき世界」も小学生が手に取るには難易度が高い。AmazonPrimeやNetFlixにも飛行機や動物のアニメはあっても、植物がメインのアニメはほぼ無い。うちの息子（2歳）は海の生物の名前を30以上は言えるのに植物については4単語くらいしか言えない。親の教育が悪い、というのも理由の一つだが、如何せん幼児向けの教育資料が不足しているのだ。そこで植物学会員が団結して、最新の研究成果を詰め込んだ幼児～小学生向けの図鑑や絵本を刊行してはどうか。エッジの効いた内容はどの年代の子どもたちにもウケること間違い無しだ。

高校生教育どころか幼児教育を率先して植物学会が先導することで、30年後には植物学会員も1万人を突破し、植物が主役のアカデミアになる。そして地味に人間活動を支えてきた植物が主役になる日が来るかもしれない。そんな日が来ることを夢見て、今日もせっせと地味な、しかし魅力いっぱい植物の世話に勤しむ。